

# 広島県出土の中国鏡について(上)

古 瀬 清 秀

## はじめに

鏡はそれ自体で、出土遺跡の編年の位置づけに確固たる地位を占めているわけではない。しかし、最近、大量の資料の集成とともに型式学的研究も進展し、中国鏡に関しては中国、朝鮮半島の出土鏡との比較検討が慎重になされ、次第に出土遺跡の細かな編年の位置づけに示準資料としての地位を獲得しつつあるといえる。

最近、広島県において、鏡の出土数が漸増しており、しかもそれらには中国鏡が多く含まれ、鏡片副葬の事例も目立っている。前述したように鏡を示準資料として位置づけるためには、まず、鏡の型式学的位置づけ、すなわち鏡式の決定および資料としての特性を明確にすることが必要であろう。

今回、特に広島県出土の中国鏡について、まず、その鏡式を決定し、出土遺跡との関連、資料的な特性などを検討することによって、それらが提起する考古学的な諸問題について考えてみたい。

## I. 広島県出土の中国鏡

### 安芸国

#### 1. 釜鋳谷遺跡出土鏡 (図版第3—13)

釜鋳谷遺跡は広島県山県郡筒賀村中筒賀に所在する。標高290m前後、平地比高15~20mの丘陵尾根傾斜面に立地する。箱式石棺、土壙の埋葬遺構が検出されているが、大半の遺構は開墾のため消滅したようである。時期的には弥生時代末から古墳時代初頭とされている。鏡は遺跡地周辺の試掘調査の際、表面採集された。遺跡地の性格からみて、墳墓に副葬されていた可能性が指摘でき

よう。

鏡は鏡縁部 5.5 cm の破片で、46.7 g を測る。復元径は 18 cm 前後とみられる。外表は光沢のある、濃青に近い黒色を呈している。幅広い平素縁に続いて内区側に一部、直行櫛歯文帯が残存する。平素縁は縁端が厚く、内区側に緩い傾斜をもつ。破面は薄緑色の緑青がみられるが、部分的に破面に研磨の光沢が認められ、鏡片として利用されていたことがわかる。

釜铸谷遺跡出土鏡は外区が傾斜のある平素縁と内側に直行櫛歯文帯をめぐらす構成になっており、面径と合せると四葉座を有する内行花文鏡とみなすことができる。この鏡式は我国で多くの出土例があり、樋口隆康氏分類の内行花文鏡 Aa7、Aaイ式<sub>3)</sub>、山本三郎氏分類の四葉座内行花文鏡 I 型 a、b 類<sub>4)</sub>に属するもので、後漢時代前半代に位置づけられよう<sub>5)</sub>。

## 2. 宇那木山第 2 号古墳出土鏡 (図版第 1—1)

宇那木山第 2 号古墳<sub>6)</sub>は広島市安佐南区佐東町緑井に所在する全長約 35 m の前方後円墳である。太田川西岸の標高 132 m、平地比高約 120 m の小高い丘陵尾根上に立地している。後円部には中央部とやや北に偏して 2 基の堅穴式石室がある。中央石室は未調査であるが、北側石室は内法全長 2.8 m・幅 0.8~1 m・高さ 1 m で、画文帯神獸鏡 1 が出土した。鏡は被葬者の頭胸部の左横から、鏡面を上に向けて出土した。宇那木山第 2 号古墳は立地、墳丘などの特徴からみて、太田川下流域では最も古い古墳の一つで、4 世紀後半頃の築造と考えられる。

鏡は面径 10.7 cm で重量 152 g を測る。全体に漆黒色を呈し光沢をもち、特に鏡面は白銀色に輝く。外縁の一部は薄緑色の緑青が吹く。鈕は径 2.1 cm・高さ 0.5 cm で、面径に比べて大形で扁平である。頂部の径 1.5 cm が平坦となる。内区は 6 個の環状乳によって 6 区画され、半肉彫の 3 神 3 獣が求心的に配される。獣像はほぼ同形で、丸味のある顔貌は虎を表現したらしく、肩と腰部の膨みが環状乳となっている。獣像はそれぞれ頭部を後ろにふり返り、巨を銜んでいる。環状乳には羽翼をひろげた禽あるいは龍を表現したとみられる図文がとりついている。神像は正面向きの有翼神人で、三山冠に似た冠帽をかぶ

り、獣の背に座している。内区外側には半円方格帯がめぐらされ、それぞれ11個の半円、方格体がある。方格体にはそれぞれ1銘字があり、時計廻りに「天王日月天王日月天王日」とある。半円体は周囲に半円形の飾りをもち、上面は平頂で無文となっている。半円、方格体の間には珠文が配される。この外側は1段高くなり、鋸歯文帯がめぐらされ、平縁の外区はいわゆる画文帯縁となる。飛禽走獣、神仙像などがみられるが、その姿態はかなり簡便化されている。外縁は菱雲文を横に半截した三角雲文がめぐらされる。画文帯環状乳3神3獣鏡といえる。

画文帯神獣鏡には環状乳式、求心式、重列式などがみられるが、特に環状乳式には元興元（105）年、延熹2（159）年、永康元（167）年、熹平2（173）年、中平4（187）年など、2世紀初頭から末にかけての紀年鏡があり、<sup>7)</sup> 紀年鏡でみる限り、画文帯神獣鏡のグループではこの鏡式が最も古い時期に出現している。これらの紀年鏡のうち、永康元年鏡<sup>8)</sup>、中平4年鏡が4神4獣型式で、他の4面が環状乳が6個の3神3獣型式である。

このように、環状乳神獣鏡には当初から3神3獣と4神4獣の2型式が認められ、3神3獣型式で方格体に1銘字を有するものが古く出現しているが、永康元年鏡、中平4年鏡のように方格体に4銘字をもち、外区に画文帯を有する整美な4神4獣型式が主流となっていたようである。

宇那木山第2号古墳出土鏡は3神3獣型式で、方格体には1銘字を有し、後漢時代にみられる古い形態を保っていることが指摘できる。しかしながら、半円、方格体や銘文の数的省略、神像の脚部、環状乳上の神仙あるいは獣像の表現ならびに縁端の菱雲文帯が半分になっていることなど、各所に簡略化の傾向がみられ、3世紀代の三国時代の製作と考えられる。我国では3神3獣型式鏡として、大阪府珠金塚古墳出土鏡<sup>9)</sup>、兵庫県宮山古墳出土鏡<sup>10)</sup>などがあげられるが、類例は少ない。宇那木山第2号古墳出土鏡に内、外区の図文構成が最も近似する例は4神4獣型式ではあるが、奈良県新山古墳出土鏡<sup>11)</sup>があげられる。

### 3. 神宮山古墳出土鏡（図版第3—12）

神宮山古墳<sup>12)</sup>は広島市安佐南区佐東町緑井に所在する径約20mの円墳である。広島湾に注ぐ太田川の支流、安川が旧太田川の古川に合流する地点を見おろす標高92.4m、平地比高約80mの小高い尾根上に立地する。数百m離れて宇那木山第2号古墳がある。埋葬施設には全長3m前後の3基の竪穴式石室がある。鏡はこのうちの全長2.9mの第3号石室から鏡片として出土した。鏡は被葬者の頭胸部横に置かれていたらしく、石室中央から少し離れて、長側壁にはほぼ接する状態で、鏡面を上に向けて検出された。他に、硬玉製勾玉、水晶製算盤玉、管玉、ガラス小玉など多数の玉類、鉄器若干が出土している。神宮山古墳は埋葬施設、出土遺物などからみて、同地域にある中小田第1号古墳、宇那木山第2号古墳と並ぶ4世紀代の古墳の一つといえる。

鏡は外区鏡縁部5分の1、長さ11.5cmの破片で、表裏とも薄い緑青に覆われているが、銅質は白銀色に輝く良質のものである。現重量は90gを測る。復元面径は19.7cmとなる。縁は縁端がやや厚くなり、内区側に傾斜をもつ平素縁で、すぐ内側に直行櫛歯文帯と斜角雷文帯が残存する。斜角雷文帯は錆化が著しく、複雑な構成を示すものか、やや便化した重弧文となるものかは不明である。平素縁の破面は両側ともよく研磨され、角はなく丸味をもつ。内区側は破面が錆化していて研磨状態は不明である。櫛歯文帯には径4.5mmの小孔が心々距離で6.3cm離れて2個穿たれている。

神宮山古墳出土鏡は面径、図文からみると、長宜子孫銘を有する四葉座内行花文鏡であろう。樋口隆康氏分類の内行花文鏡Aa7、Aaイ式<sup>13)</sup>、山本三郎氏分類の四葉座内行花文鏡I型a、b類に相当するものである。製作年代については、『焼溝漢墓<sup>15)</sup>』出土鏡編年では雲雷紋連弧文鏡は上限を東漢初におき、下限を東漢中葉としている。神宮山古墳出土鏡は面径、図文などの特徴からみると、比較的古い様相を示しており、後漢時代前半代の製作とみることができよう。

#### 4. 中小田第1号古墳出土鏡（図版第1—2・3）

中小田第1号古墳<sup>16)</sup>は広島市安佐北区高陽町小田に所在する。太田川東岸の標高97m、平地比高80mの小高い尾根上に立地する。墳丘は流失土が著しいが、

全長約30m、後円部径約20m・同高約4mの前方後円墳とみられる。後円部に内法全長3.5mの竪穴式石室がある。石室内の頭胸部とみられる北東側は朱痕が著しく、鏡2面をはじめ、碧玉製車輪石、硬玉製勾玉、管玉、短冊形鉄斧、有袋鉄斧などが出土した。鏡2面は石室中軸線上の頭胸部付近から、互いに鏡面を合せた状態で出土し、上側に三角縁神獸鏡、下側に斜縁獸帯鏡が置かれていた。中小田第1号古墳は遺物の組み合わせからみて4世紀後半頃の築造とみられる。

#### a. 三角縁神獸鏡（2）

径は20.1cm、重量は1,116gを測る。鑄上りは非常に良好で、灰黒から漆黒色を呈し、鏡面には白銀色の光沢がある。円座をもつ鈕のすぐ外側に8個の小乳を配し、内区は4個の乳で4区画され、求心的に有翼の双神像と巨を銜み互いに向い合う双獸像が交互に配される。一方の双獸像の間には笠松形の旒が置かれる。内区と銘帯の間には山形突圍帯があり、内側の斜面に鋸歯文帯をめぐらす。銘帯には逆時計廻りに「吾作明竟基大弓、上有王喬及赤松、師子天鹿其隣龍、天下名好世無雙」の28銘字からなる銘文がある。銘文の初めと終りの間には「◇」文様を置いている。銘帯の外側は1段高くして、内側の斜面に鋸歯文帯をめぐらし、外区縁部は鋸歯文帯、複波鋸歯文帯と続き、シャープな三角縁となる。三角縁吾作銘4神4獸鏡である。

小林行雄氏の同範鏡番号17の鏡式で、京都府椿井大塚山古墳<sup>17)</sup>（2面）、大阪府万年山古墳<sup>19)</sup>、福岡県石塚山古墳出土鏡<sup>20)</sup>と同範関係にあるとされている。

#### b. 斜縁獸帯鏡（3）

径13.0cm、重量250gを測る。全体に暗緑色を呈するが、鏡面は漆黒色の光沢をもつ。この鏡式の鏡に多くみられるように、内区図文、銘文は鑄上りが甘く、シャープさに欠ける。円座をもつ鈕はすぐ外側に太い有節重弧文帯をめぐらし、全体として有節重弧文鈕座を構成する。内区は6乳によって6区画され、半円形の神仙1、禽1、鹿1、龍あるいは虎3が配される。内区図文を神仙像から時計廻りに順にみると、まず、神仙は横向きで、參龍氏を表現しているようである。その左となりには神仙と向い合う龍とみられる獸像がある。

次に同じ向きであるが、頭を後ろにふりかえった獣像があり、続いて向きが逆になった鹿がある。そして、これに向い合う龍あるいは虎が続き、最後はまた向きが逆になり、禽が両翼をひろげている。銘帯には時計廻りに「上方乍竟真因工青龍白子」の11銘字からなる銘文がある。外区は直行櫛歯文帯を挟んで1段高くなり、鋸歯文帯が2帯あり、斜縁となる。斜縁上方乍銘6像式獣帯鏡といえる。

後漢時代の方格規矩鏡、獣帯鏡などの外区平縁上の図文構成をみると、一番内側に外向鋸歯文帯をめぐらし、その外側に複波鋸歯文、流雲文、唐草文帯などを配している。このうち、複波鋸歯文縁は後漢時代を通してみられ<sup>21)</sup>、獣帯鏡式の場合、斜縁、半肉彫の内区図文などの新しい要素をもつ、最も後出型式の斜縁獣帯鏡もこの縁を採用している。京都国立博物館守屋コレクション中にみられる斜縁翟氏作6像式獣帯鏡は面径17.8cmを測り、斜縁獣帯鏡の中では銘文、内区図文ともに最も整ったもので、外区に複波鋸歯文帯をもつ。製作年代は斜縁を有することや内区獣像文に新しい要素がみられることなどから、後漢時代末から三国時代初頭頃とみられる。しかし、中小田第1号古墳出土鏡およびそれに類似する大半の斜縁獣帯鏡は面径が13cm前後に小型化しており、その分だけ外区文様帯の省略化、すなわち複波文帯の消去が認められる。銘文も「上方乍竟真大工……」の簡略化されたものがほとんどとなり、製作年代もやや下るものと考えられる。したがって、斜縁獣帯鏡は後漢時代末頃に出現し、中小田第1号古墳出土鏡などの小型化、簡略化されたものは三国時代から西晋時代に盛行した鏡式といえる。<sup>24)</sup>

##### 5. 馬場谷第2号古墳出土鏡 (図版第1—4)

馬場谷第2号古墳は広島県三原市沼田東町納所に所在する。直径約14m・高さ1.5mの円墳で、中央部に粘土槨と推定される埋葬施設があり、鏡2 (中国製斜縁獣帯鏡、仿製7乳揆文鏡)、玉類、筒形銅器、鉄剣、鉄鏃、土師器などが出土している。5世紀前半の築造とみられる。<sup>25)</sup>

斜縁獣帯鏡は面径10.8cmで、全体に漆黒色を呈し、光沢をもつ。内区は

円座鈕を中心に、円座をもつ4乳で4区画されており、求心的に半肉彫の禽獸4像が配される。時計廻りにみると、左向きに翼をひろげた禽、右向きで禽と向い合い、屈曲した長い尾をもつ龍または虎とみられる走獸、左向きの鹿、右向きで鹿と向い合う龍または虎とみられる走獸となり、2番目と4番目の走獸はほぼ同形である。銘帯には時計廻りに「上方乍竟□大工白子」の9銘字がある。銘帯の外側は直行櫛歯文帯を配し、ここから外区となる。1段高くして2帯の鋸歯文帯をめぐらし、斜縁となる。この鏡は斜縁上方乍銘4像式獸帯鏡といえる。

中国、朝鮮半島では斜縁4像式獸帯鏡は、四神をモチーフにした図文構成が後漢時代後半～末頃にみられるが、<sup>27)</sup> 我国ではこの種の例はほとんど出土しない。現在知られているほとんどが馬場谷第2号古墳出土鏡に類似するもので、これらの鏡式は、後漢時代に盛行した細線式、半肉彫式獸帯鏡に直接的な系譜をもつ斜縁6像式獸帯鏡と共通した図文構成であるため、四神を意識しない龍、虎、鹿、禽、神仙を組み合わせた図文構成となっている。この鏡式も斜縁<sup>28)</sup>6像式獸帯鏡と同様、三国時代以降に盛行したとみられ、我国で出土するほとんどの例は三国、晋時代に属するものと考えられる。

馬場谷第2号古墳出土鏡に近似する例として、兵庫県塚本（野）古墳出土鏡<sup>29)</sup>があげられる。この鏡は4像のうち1像を欠失しているが、両者は細部に至るまで似ている。しかし、塚本古墳出土鏡は銘文、図文の表現および铸上りがかなり精緻である。馬場谷第2号古墳出土鏡はこの点、かなり簡略化が目立ち、時期的にやや後出するものと考えられる。

## 6. 鍛冶屋迫第4号古墳出土鏡（図版第1—5）

鍛冶屋迫第4号（宮仕川）古墳は広島県豊田郡本郷町下北方に所在する全長<sup>30)</sup>21m、高さ3mの前方後円墳である。沼田川に合流する尾原川の開析した谷平野をみおろす標高約120m、平地比高約100mの丘陵尾根上に立地する。後円部にある全長2.1m、幅0.54m、高さ0.43mの箱式石棺から画文帯神獸鏡、硬玉製勾玉2が出土している。5世紀初頭前後の築造と推定され、現在のところ

沼田川流域では最古の古墳である。

鏡は面径 12.5 cm で、鏡縁の一部が錆化するほかは全体に鋳上りも良好である。内区は円座をもつ鈕を中心に、4 個の小乳で 4 区画され、それぞれ龍あるいは虎とみられる獣像 1・脇神 1 をもつ神像 1 を単位図文として求心的に 4 単位を配し、4 神 4 獣の形をとっている。獣像はすべて乳の左側から乳にとりすがるようにめぐらされている。神像は正面向きに近く やや斜めにかしげた主神像と左側の跪く脇神で構成される。内区外縁には各 16 個の半円方格帯がめぐらされ、方格体には各 1 個の銘字があるが、銘文は判読されていない<sup>31)</sup>。半円体上には「※」文様が施されている。外区は斜面に鋸歯文帯をめぐらし、1 段高くなった平縁上には飛禽走獣文帯と菱雲文帯を横に半載した三角雲文が配されている。

この鏡に類似するものとして、岐阜県円満寺古墳<sup>32)</sup>、奈良県古市方形墳<sup>33)</sup>、同県天神山古墳出土鏡<sup>34)</sup>などの類例があげられるが、出土数は比較的少ない。樋口隆康氏分類<sup>35)</sup>では画文帯求心式蟠龍文 4 乳神獣鏡とされるものである。同向式神獣鏡 B 式にみられるように、乳をめぐる獣像が内向きに向い合ったり、互いに外向する例は求心式の場合も円満寺古墳、天神山古墳出土鏡などで認められるが、鍛冶屋迫第 4 号古墳および古市方形墳出土鏡はともに獣像がすべて同じ向きになっており、神像と組み合わせた同一の単位文を 4 回繰り返しているだけで、複雑な図文を有する円満寺古墳出土鏡のグループよりかなり簡略化した表現になっている。三国～晋時代の製作であろう。

## 備 後 国

### 7. 西酒屋高塚古墳出土鏡 (図版第 1—6)

西酒屋高塚古墳<sup>36)</sup>は広島県三次市西酒屋町高塚に所在する帆立貝形古墳である。三次盆地の南部に広がる丘陵地帯西端近くの丘陵端に立地する。墳丘の規模は全長約 56 m、後円部径約 46 m・同高約 7.5 m、前方部幅約 7 m・同高約 2 m である。埋葬施設は後円部にある竪穴式石室で、石室内から画文帯神獣鏡、鉄刀、鉄鍬などが出土した。墳丘上には埴輪、葺石の外表施設がある。5 世紀

後半代の築造とみられる。

鏡は面径 20.8 cm で、表裏とも漆黒色を呈し光沢をもつ。有節重弧文鈕座をもち、内区には重列式に上部から伯牙彈琴像、獸頭を中心に置いて向い合う鐘子期和侍者像、鈕を挟んで左に東王父、右に西王母像、最下段に黄帝、句芒とみられる神像がある。その間に4乳を配し、それをめぐるように龍、虎像が4体みられる。内区外側は1段高くして内側斜面に鋸歯文帯をめぐらし、半円方格帯となる。それぞれ14個の半円、方格体があり、方格体は上面が4区画され、56銘字からなる銘文がある。「吾作明竟、幽涑三商、配像萬疆、競德序道、敬奉賢良、周刻典祠、白牙拳楽、衆事主陽、福祿正明、富貴安楽、子孫番昌、賢者高頭、士至公卿、与師命長」と判読されている。<sup>37)</sup>半円体は無文平頂で、周囲に半円形の飾りをもつ。ここから1段高くして斜面に鋸歯文帯を配し、外区となる。いわゆる画文帯縁で、時計廻りに飛禽走獸がめぐらされ、外縁は菱雲文帯となる。画文帯同向式神獸鏡とされるものである。

この鏡式は熊本県江田船山古墳出土鏡をはじめ、我国では21面の同型（箱鏡）<sup>38)</sup>が確認されており、著名であるが、内区の乳の有無と獸像の向きによって、A、Bの2型式に分類されている。<sup>39)</sup>江田船山古墳、西酒屋高塚古墳出土鏡の属するグループはB型式で、4世紀代の製作とされている。ただ、このB型式には朝鮮半島貞柏里第3号墳<sup>40)</sup>、岡山県湯迫車塚古墳出土鏡<sup>41)</sup>など、内、外区図文が非常に精緻で鋳上りの良好なものが含まれている。これらはA型式と同様、3世紀代の製作と考えられ、江田船山古墳、西酒屋高塚古墳出土鏡をはじめとするB型式グループはこの種の鏡群を、やや遅れて原鏡にして製作したか、踏み返した可能性が指摘されている。<sup>42)</sup>

#### 8. 四拾貫第9号古墳出土鏡（図版第3—14）

四拾貫第9号古墳<sup>43)</sup>は広島県三次市四拾貫町に所在する径10m・高さ2.5mの円墳である。埋葬施設は粘土槨と箱式石棺がある。墳丘中央部に長さ3.2mの粘土槨があり、棺内の頭胸部付近から硬玉製勾玉、管玉、ガラス小玉多数が、足辺の小口壁に近く、土師器が出土している。鏡は鏡片の状態で、玉類の下面

から鏡面を上に向けて検出された。この古墳は5世紀前半頃の築造と推定できる。

鏡は鈕を含む長さ 9.3×6.1 cm の鏡片で、重量 45 g を測る。表裏とも濃緑色を呈し、光沢がある。円座鈕の外側は円圏帯がめぐらされ、この圏帯には3本単位の突線が求心的に配され、現状で5単位が残る。全体では7単位になるようである。この外側を幅 4 mm の突圏帯がめぐる。突圏帯上には現状では銘文、図文は確認できない。内区は円座をもつ6乳で6区画されていたようで、現在、3乳と半肉彫の4像が残存する。内区図文は時計廻りにみると、横向きの神仙像、龍らしい獣像、意味不明像、鹿らしい獣像がある。銘帯があり、一部に銘字らしい突線がみえるが、判読できない。狭い直行櫛歯文帯をはさんで1段高くなり、縁となる。縁部がいかなるものかは不明であるが、鋸歯文帯の一部が残存している。

この鏡片は全体形が三角形に近く、鈕側の長辺となる破面は角がとれて丸味をもつほどに研磨されているが、他の2辺の破面は角がとれていない。ほとんど研磨を施していない可能性もある。また、鏡背の図文、乳などの突起物はよく光沢を保ち、あるいは特に研磨された可能性も考えられる。

獣帯鏡は鈕の周囲に平頂突圏帯をめぐらすもの、盤龍座文を有するものなど、鈕をめぐって突圏帯や銘文や図文を配する例が多い。獣帯鏡の中でも、内区図文が半肉彫となる新式のものについてみると、かつて幅広であった鈕周囲の平頂突圏帯が分断されて次第に狭くなり、間に断面カマボコ形の有節重弧文をもつ突帯を配するものも出現してくる。<sup>44)</sup>

四拾貫第9号古墳出土鏡は鈕の周囲に3本単位の突線文と断面カマボコ形の突圏帯の組み合わせが目される。この特徴は京都国立博物館守屋コレクションの斜縁翟氏作6像式獣帯鏡などの型式の略化としてとらえることができる。<sup>45)</sup>しかし、内区図文に意味不明像がみられ、これを正面向きの神像とみると、このような図文は獣帯鏡の範疇の中ではみられないものである。このため、仿製鏡の可能性も考えられるが、ここでは中国鏡として取扱い、6像式獣帯鏡としておきたい。<sup>46)</sup>我国で多くみられる斜縁上方乍銘6像式獣帯鏡よりは、後漢時代の獣

帯鏡により近似する鏡式とみることができ、その製作年代は後漢時代末から三国時代頃に考えたい。

#### 9. 石鎚権現第5号古墳墳丘裾第14号土壙墓出土鏡（図版第3—15）

石鎚権現古墳群<sup>47)</sup>は広島県福山市駅家町大橋に所在する。古墳群最大の第5号古墳は全長37.5mの前方後円墳で、墳丘裾に7基の土壙墓を伴い、特に前方部裾に6基が集中している。第14号土壙墓は前方部側辺の裾にあり、全長1.87m・幅0.45m・深さ0.4mを測る。土壙中央からやや小口壁に偏した床面から鏡片1個が出土した。第5号古墳は竪穴式石室から小形仿製内行花文鏡、鉄剣、鉄鏃、鉄鉈などが出土し、5世紀前半の築造とみられる。第14号土壙墓被葬者は第5号古墳被葬者と密接な関係にあったことが窺われ、築造時期もほぼ同時期とすることができよう。

鏡は約3.5cm大の六角形を呈する小破片となっており、重量は12.4gを測る。面径は9cm前後に復元できる。漆黒色を呈し、全体に光沢が認められる。鈕と2個の乳が残存しており、それぞれ円座をもつ。乳の間に半肉彫の禽の頭頸部が左向きに表現されている。禽の頭部から左3辺の破面は丸味をもつほどに研磨されているが、禽の頭部上側から右3辺の破面は角がとれていない。研磨が施されたとしても、鈕の左側3辺とは大きな差が認められる。この鏡の鏡式は飛禽鏡である。

飛禽鏡は外区構成が平素縁と斜縁に鋸歯文帯を有する2型式があり、後漢時代末～三国時代という年代が与えられているが、中国での出土数が少なく、所屬時期が今一つ不明確である。我国での出土数も少なく、平素縁を有するものに京都府成山第2号古墳出土鏡<sup>49)</sup>、斜縁に鋸歯文帯を有するものに福井県岩内山遺跡D地点出土鏡<sup>50)</sup>、京都府上大谷第11号古墳出土鏡<sup>51)</sup>、福岡県汐井掛遺跡D28出土鏡<sup>52)</sup>などがある。いずれも半肉彫の飛禽が表現されているが、禽の頭部の向きや内区の充填図文の細部に異なる点が少しずつみられる。石鎚権現第14号土壙墓と内区図文構成の近似するものとして、上大谷第11号古墳、成山第2号古墳出土鏡があげられる。外区構成については平素縁式、斜縁式のいずれか断定は

困難である。なお、汐井掛遺跡D28出土鏡は石鍵権現第14号土墳墓出土鏡と同様、鏡片として副葬されている点で興味深い。

#### 10. 潮崎山古墳出土鏡（図版第2—7）

潮崎山古墳は広島県芦品郡新市町に所在する。備後最大の芦品川によって開析された神辺平野<sup>53)</sup>のほぼ西端近くの標高70m、平地比高60mの独立山丘上に立地する。現在、頂上部は直径17m、高さ1.6mの円墳状を呈しているが、平野方向に向けて、すでに削平された狭い尾根が連続してのびており、当初は全長30m程度の前方後円墳であった可能性が強い。江戸時代に発掘され、石材を用いた埋葬施設の内部から三角縁神獸鏡、長さ25cmの短冊形鉄斧が出土している。備後地方では最も古い、4世紀前半代の古墳と考えられる。

鏡は面径22.1cmの三角縁神獸鏡で、重量は844gである。表裏ともにはほとんど錆はみられず、黄味を帯びた銀色を呈し、光沢をもつ。铸上りは非常に良好で、内区図文もシャープである。円座鈕をもつ内区は4乳で4区画され、求心的に複像式の神像、獸像が配されている。乳の頂部は尖らず、平頂になっている。神像には、3神像と双神像のグループが対置する位置に置かれている。前者は正面向きの主神像と、その両側に笏をもった横向きの小さな脇神2像で構成されている。主神像は冠帽から西王母とみられ、2頭の龍らしい獣の上に座す。脇神像は獸像の尾の上に座している。後者は間に笠松形の旒を置き、正面向きの神像と斜めに座す神像からなる。正面向きの神像は冠帽から東王父とみられる。この東王父像横の獸像の尾の上には小さなカエルがいて、鈕を挟んで相対する位置の獸像の尾の上には小さな鳥がいる。獸像は4像あり、それぞれ2獣ずつが向い合う形で、巨を銜み、鈕を中心に対置している。獸像は有角で、単角と双角のものがあり、辟邪、天鹿を表現するものであろう。また、向い合う獸像の間には正面向きの獸頭が配される。内区外縁は山形に1段高くして、内側の斜面に鋸歯文帯をめぐらす。銘帯は6乳で6区画され、それぞれに両側を神人、獸像で挟まれた形で6個の方格体があり、各々1銘字をもつ。時計廻りに「天王日月天王」とある。神人、獸像など12体の像にはさまざまな姿

熊の走獣4、羽翼をひろげた鳥4、玉をささげもつ神仙2、魚を追う鳥1、玄武1がある。外区は直行櫛歯文帯をめぐらし、そこから1段高くした斜面に鋸歯文帯、高くなった平坦面上に鋸歯文帯、複波鋸歯文帯と続き、三角縁に至る。複波鋸歯文帯の複波文帯には内、外の空間に珠文を配する。三角縁天王日月銘獣文帯5神4獣鏡である。

小林行雄氏同範鏡番号24の鏡式<sup>54)</sup>で、鳥取県国分寺古墳出土鏡と同範関係にあることが指摘されている。

### 11. 今岡出土鏡（図版第2—8・9）

鏡は広島県福山市駅家町今岡に所在する遺跡から出土したとされる。今岡地区には多くの古墳が存在し、4・5世紀にかけての前半期古墳も含まれる。鏡は箱式石棺から出土したとされ、古墳の副葬品と考えられるが、現在、石棺のあったとされる丘陵は削平され、詳細は不明となっている<sup>55)</sup>。鏡は2面分の破片があり、1面は凹帯縁を有するもの、他の1面は斜縁を有するものである。

#### a. 凹帯縁鏡（8）

内区のはとんどを欠失した外区鏡縁約半周分の破片で、面径は11.1cmに復元できる。銅質はきわめて良く、ほとんど錆はみられず、全体が白銀色に輝いている。外区は厚さ0.5cmのぶ厚い凹帯縁で、上面に幅0.65cmの凹帯が施され、内部にやや幅広の突線で鋸歯文帯がめぐらされている。縁部から1段下って斜行櫛歯文帯がめぐらされ、内区となる。わずかに残存する内区には2ヶ所に図文の一部とみられる突線がある。全体に鑄上りが甘く、図文もシャープさに欠ける。鏡縁部には稜はみられず、縁端も丸味をもつ。

凹帯縁を有する鏡式は、『焼溝漢墓』<sup>56)</sup>によれば、59B号墓出土方格規矩鏡、1034号墓出土鳥文鏡などがある。『広州漢墓』<sup>57)</sup>によれば、3029号墓出土獣帯鏡、4008号墓、5010号墓出土方格規矩鏡などがある。我国では宮城県一ツ塚古墳<sup>58)</sup>、徳島県星河内丸山古墳出土鳥文鏡<sup>59)</sup>、京都府美濃山大塚古墳、福岡県大井出土方格規矩鏡、佐賀県二塚山遺跡第29号土墳墓出土獣帯鏡<sup>60)</sup>などの出土例があるが、数量的には少ない。<sup>61)</sup>

これらの凹帯縁を有する鏡式の所属する時期として、『焼溝漢墓』では新～後漢時代初頭、『広州漢墓』では前漢時代後期から後漢時代後期が与えられている。また、凹帯縁鏡は、前漢時代後期に盛行した連弧文鏡、四乳虺龍文鏡などの<sup>63)</sup>ぶ厚い平素縁と内区に接して斜行櫛歯文帯を有する鏡式の系統の中から出現し、その後に盛行する方格規矩鏡、獸帯鏡などの外区にも採用されるようになった。そして、それらの鏡式が衰微していく後漢時代後半頃にみられなくなる。『焼溝漢墓』、『広州漢墓』出土鏡が示すように、後漢時代初頭前後に最も盛行したようである。

今岡出土の凹帯縁鏡は内区のほとんどを欠失しており、ただちに鏡式を復元することは現状では困難であるといわざるをえないが、後漢時代後半以前に製作されたことは確かであろう。

#### b. 斜縁鏡（9）

斜縁鏡は外区鏡縁部と鈕の5片が残存し、面径約 13 cm に復元できる。鏡背は全体に薄緑色の錆がうすく付着しているが、図文および稜になった部分はシャープである。鏡面は白銀色に輝き、銅質は非常に良い。鈕は整美な半球体で、ほぼ方形の鈕孔をもつ。鈕孔内には紐の一部が残存する。円座鈕の外側は有節重弧文帯がめぐり、全体として鈕座は有節重弧文鈕座となっている。外区鏡縁部は銘帯外側の直行櫛歯文帯に続いて1段高くなり、外向鋸歯文帯が2帯めぐらされ、斜縁となる。

外区の構成が斜縁と外向鋸歯文帯を2帯もつ組み合わせの鏡式は方格規矩鏡、獸帯鏡、盤龍鏡などがあるが、今岡出土鏡は鈕座に有節重弧文帯をめぐらすなどの特徴から、斜縁半肉彫獸帯鏡と考えられ、面径、鈕座の形態から推定すると、我国で出土例の多い斜縁（上方乍銘）6像式獸帯鏡に比定できよう。一般にこの鏡式に属する鏡は铸上りの甘さが目立つが、今岡出土鏡は銅質も良く、非常にシャープな作りである。三国時代の製作であろう。

#### 12. 石鎚山第1号古墳出土鏡（図版第2—10）

石鎚山第1号古墳は<sup>64)</sup>広島県福山市加茂町上加茂に所在する直径20m・高さ約

3 mの円墳である。加茂の平野を見おろす標高63m、平地比高約40mの丘陵突端に立地する。墳丘裾と中段に列石をめぐらす。埴輪、葺石はない。埋葬施設は2基の竪穴式石室がある。中央にある第1号石室は内法全長2.8mで、墳丘外部に連続する長さ約7mの排水溝を付設する。石室内から男性人骨1体分、鏡、硬玉製およびコハク製勾玉、管玉、刀子、鉈、石室外から定角式鉄鍬が一括出土した。鏡は被葬者の左肩横から鏡背を上にして出土した。第2号石室は東に偏してあり、コハク製勾玉、鉄剣、刀子、鉄鍬、銅鍬が出土した。石鎚山第1号古墳は4世紀中葉から後葉にかけての築造であろう。

鏡は面径15.8cm、重量656gを測る。表裏とも黒灰色を呈し光沢があるが、鏡面は白銀色に輝く部分がみられる。内区は4乳によって4区画され、鈕に向って求心的に半肉彫の2神2獣を神、獣交互に配置する。2神は冠帽の相違から東王父と西王母とみられ、それぞれ脇神をもつ。2獣は頭部を正面に向けた像とやや横向きにした像がある。時計廻りにみると、まず三山冠をかぶり、やや横向き姿勢の東王父とそれに向い合って片膝をつく脇神がある。次に四肢を踏んばり、頭部をやや横向きにした右向きの獣像があり、下肢側の乳の外側に小さい鳥を置く。次に左側に脇神を置く西王母があり、四肢を踏んばり頭部を正面に向けた右向きの獣が続く。内区図文、銘文の鑄出しはややシャープさに欠けるが、この鏡式の他の鏡に比較すると良好である。銘帯には時計廻りに、「吾作明竟、幽涑三商、鏡徳序道、配像萬彊、曾年益寿、子孫番昌」の24銘字がみられる。外区は銘帯の外側に直行櫛歯文帯を置き、1段高くして鋸歯文帯、複波鋸歯文帯、斜縁となる。

この鏡式は斜縁吾作銘2神2獣鏡とすることができ、そのほとんどが我国で出土し、中国で出土するものとは内区図文に相違がみられる<sup>65)</sup>。面径15cm前後で、龍、虎とみられる獣像と、東王父、西王母とみられる神像およびそれに付随する脇神を求心的に配置し、「吾作明竟」に始まる銘文を有するものが多い。我国だけで30面前後の出土例があるが、2獣像は左向きに配置される例が大半であり、石鎚山第1号古墳出土鏡のように右向きに配されるのは、奈良県古市方形墳<sup>66)</sup>、大阪府ヌク谷北古墳出土鏡<sup>67)</sup>など数例にすぎない。

この鏡式は前述したように内区図文の鑄上りの甘さが目立つが、島根県造山第3号古墳<sup>68)</sup>、京都府金比羅山古墳<sup>69)</sup>、大阪府弁天山C1号古墳出土鏡<sup>70)</sup>などの「吾作明竟、自有紀……」式銘文を有するものは精良な鑄上りが多く、「吾作明竟、幽漣三商……」式銘文を有するものに甘い鑄上りが目立つ傾向がある。石鎚山第1号古墳出土鏡は「吾作明竟、幽漣三商……」式銘文を有するものの中では、24銘字もすべて揃い、一部に甘さのみられる図文もあるが、全体として良好な製品である。三国時代の製作であろう。

### 13. 石鎚山第2号古墳出土鏡（図版第3—16・17）

石鎚山第2号古墳<sup>71)</sup>は広島県福山市加茂町上加茂に所在する。石鎚山第1号古墳と同一丘陵尾根上にあり、第1号古墳の南東約20mに位置する。直径約16m・高さ約2mの円墳である。埋葬施設は木棺直葬と粘土槨の2基がある。木棺直葬は2段に掘られた墓壇内に、長さ1.8m・幅0.7mの組み合わせ式箱形木棺を納置したもので、棺内から人骨片、内行花文鏡片、棺外から刀子、鉈が出土した。鏡は2面あり、いずれも鏡片を副葬したもので、両者ともに被葬者の頭部右側の棺隅から出土した<sup>72)</sup>。粘土槨は全長2m・径0.45mの割竹形木棺を納めているが、副葬遺物は検出されなかった。墳丘上には埴輪、葺石の外表施設はみられない。第1号古墳とほぼ同時期かやや遅れた時期に比定でき、4世紀後半～末頃の築造といえよう。

#### a. 円圈座内行花文鏡（16）

鈕とその周辺わずかの小破片である。銅質は非常に良好で、白銅質である。4.1×2.9cmの大きさで、重量は27gを測る。鏡片として副葬されたものである。鈕は半球形を呈さず、先細の円錐形をなしている。鈕の外側を幅2.3mmの低い平頂突圈帯がめぐり、円圈座を構成している。鈕を挟んで2ヶ所に内行花文の弧の部分がみられる。破面には、角が丸味を帯びるほどに研磨された部分と、ほとんど研磨が施されていないようにみえる部分がある。このような研磨状態の違いが最初から意図的になされたものか、あるいは全周を入念に研磨した後再び割れて破面が生じたが、その後に研磨されることのなかった状態

を示すものかは不明である。

さて、この鏡式は円圈座内行花文鏡といえるが、この鏡式について、樋口隆康氏は内行花文鏡 Caイ、Caウ、Cbイ、Cbウ、Ccウ式の5式に分類し、山本三郎氏は円座内行花文鏡Ⅰ型 a、b、c類、Ⅱ型の2型4類に分類している。<sup>73)</sup>年代については、樋口氏は特にふれていないが、山本氏はⅠ型についてはやや便化した斜角雷文帯の存在から後漢時代中期、Ⅱ型は後漢時代晩期として<sup>74)</sup>いる。石鎚山第2号墳出土鏡は内、外区の大半を欠失しており、図文構成が不明のため細かな分類の所属および製作年代は明確にできない。ただ、鈕が小形で円錐形に近く先細となる点など、古い要素を保っていることが指摘できる。<sup>75)</sup>

#### b. 蝙蝠座内行花文鏡(17)

鈕を欠くが、ほぼ半面分が残存する鏡片である。面径12.7cmで、現重量は98gを測る。銅質は非常に良質で、わずかに緑青がみられるが、全体に白銀色に輝いている。鈕座は蝙蝠座で、2葉が残存しており、間に時計廻りに「君宜」の2銘字がある。「君宜高官」、あるいは「君宜子孫」の銘文を有するとみられる。この外側に平頂突圈帯がめぐり、内行花文帯となる。5花文が残存するが、2花文ごとに谷の部分に時計廻りに1銘字が配され、ここでは「生如」の2銘字がみえる。全体の銘文は「生如金(山)石」とみられる。内行花文帯の外側は凹圈帯を挟んで平素縁となる。<sup>76)</sup>この鏡は鏡片として副葬されており、破面は角が丸味をもつほどに研磨されている。鈕座の部分に2mmと2.6mmの小孔2個が4cmの間隔で穿たれている。

樋口隆康氏分類では内行花文鏡蝙蝠座 Bcイ式、山本三郎氏分類では蝙蝠座内行花文鏡Ⅱ型 a類に属する。<sup>77)</sup>蝙蝠座を有するものとして整美なもので、『焼溝漢墓』出土鏡編年によると、後漢時代晩期に属するものである。なお、福岡県潜塚古墳出土鏡は石鎚山第2号古墳出土鏡と同様、内行花文帯と外区平縁との境に凹圈帯を有する蝙蝠座内行花文鏡で、半面分の鏡片には懸垂用とみられる小孔2個を穿っており、注目される。<sup>78)</sup>

#### 14. 神辺御領遺跡E地点出土鏡(図版第3—18)

神辺御領遺跡は広島県深安郡神辺町下御領に所在する。縄文時代後期以降、<sup>82)</sup>古墳時代に至る複合遺跡で、中心時期は弥生時代後期から古墳時代前期である。国鉄井原線建設に伴い、A～Fの6地点が調査された。E地点は遺跡の西端近くに位置し、約200mの調査区間から溝状遺構10、土器溜り状遺構2が検出された。このうちSD 09遺構は上端幅2.2～2.3m・下端幅1.8m・深さ0.8～1mの溝で、弥生時代中期以降、古墳時代前期に至る土器が多量に出土した。特に溝上層では古墳時代前期に属する一括土器群が出土し、鏡片はこの中に含まれていた。ただし、この土器群中には弥生時代中、後期の土器も若干含まれており、鏡片の属する時期については特定できないものの、古墳時代前期の土器に伴う蓋然性が最も高いといえる。

鏡は4.2×2.2cmの小破片である。厚さは1.1mmと薄い。重量は5.1gである。暗緑色を呈し、全体ににぶい光沢がある。鏡背部は内区には円座をもつ乳1個と細線式図文があり、外区は銘帯に相当する狭い素圏帯を挟んで、直行櫛歯文帯がある。鏡縁部は不明となっている。復元すれば、面径11cm前後となろう。鏡片の破面は鈕に面した1破面を除いて、他はすべて角がとれて丸味をもつほどに研磨を施している。また、細線式図文、乳、突線など突起物は入念な研磨がなされたのか、すべて平板なものになっている。内区の細線式図文の右隅および鈕側破面に径2mmほどの小穿孔2個がみられ、鈕側破面の穿孔は半分が破面に遺存している。また、乳の鈕に面した部分も破面が凹んでおり、穿孔されていた可能性がある。なお、穿孔痕の残る破面はほとんど研磨されていない状態で、最初から2個以上の穿孔があったとすれば、使用中になんらかの外力で割れ、その後はそのままにしておかれたことも考えられる。

内区図文はなにか花のような物体をささげもつ豨龍氏の上体とみることができ<sup>83)</sup>。このような内区図文と円座乳、狭い素圏帯、直行櫛歯文帯を組み合わせるともつ鏡式は小形化された簡略形態の獸帯鏡、あるいは方格規矩鏡が考えられる。乳、内区図文の配置をみると、獸帯鏡の可能性が強く<sup>84)</sup>、類似例として奈良県大正村（現 御所市）出土獸帯鏡などがあげられる。獸帯鏡は方格規矩鏡<sup>85)</sup>とともに前漢時代末頃に出現し、新～後漢時代前半にかけて盛行している。

後漢時代後半になると、内区図文が半肉彫化したり、玄武像の変形省略、參龍氏の表現の粗雑化がみられる。この点、神辺御領遺跡出土鏡は内区図文が細線式であり、參龍氏の表現も盛行期のものに類似する。これらの諸点から神辺御領遺跡出土鏡は後漢時代前半代に属するとみてよからう。

### 15. 蔵王原遺跡出土鏡（図版第2—11）

蔵王原遺跡<sup>87)</sup>は広島県福山市千田町蔵王原に所在する。果樹園造成中に多くの遺構が検出された。このうち、円形石築遺構から鏡が出土している。この遺構は直径約15mで、外縁には高さ約0.5mに石材を2、3段に積み上げている。中央付近から鏡、土師器片などが検出された。遺跡は造成工事に伴って発見されたため、その全容が明確でなく、遺跡の性格、時期については不明の点が多い。しかし、鏡の内区図文の一部に朱が付着していることから古墳であった可能性が強い。

鏡は面径 11 cm、縁厚 0.65 cm で、重量 175 g を測る。鏡面は漆黒色を呈し、光沢がある。部分的に薄緑色を呈する。円座鈕を中心に4個の乳で区画された内区には1禽3獣が半肉彫されている。禽は右向きで、両翼を左右にひろげた姿態である。順次、時計廻りにみると、禽の左には右向きの獣が配置されている。たてがみ状の毛の表現もみられ、尾を屈曲させた獣は龍か虎を表わしたものであろう。次に向きが逆になった獣像がある。尾は明瞭でないが、その部分に羽毛状の表現がみられ、しかも角をもつことから鹿を表わしたものであろう。最後に鹿と向い合う形で、右向きの長い屈曲した尾をもつ獣像がある。鈕をはさんで反対側の獣像と近似しており、龍か虎とみられる。銘帯には逆時計廻りに「**国方**□**竟**□**大工青白宜子**」の11銘字が配されている。外区は直行櫛歯文帯、1段高くなり、2帯の鋸歯文帯に続いて斜縁となる。斜縁上方に銘4像式獣帯鏡とすることができる。

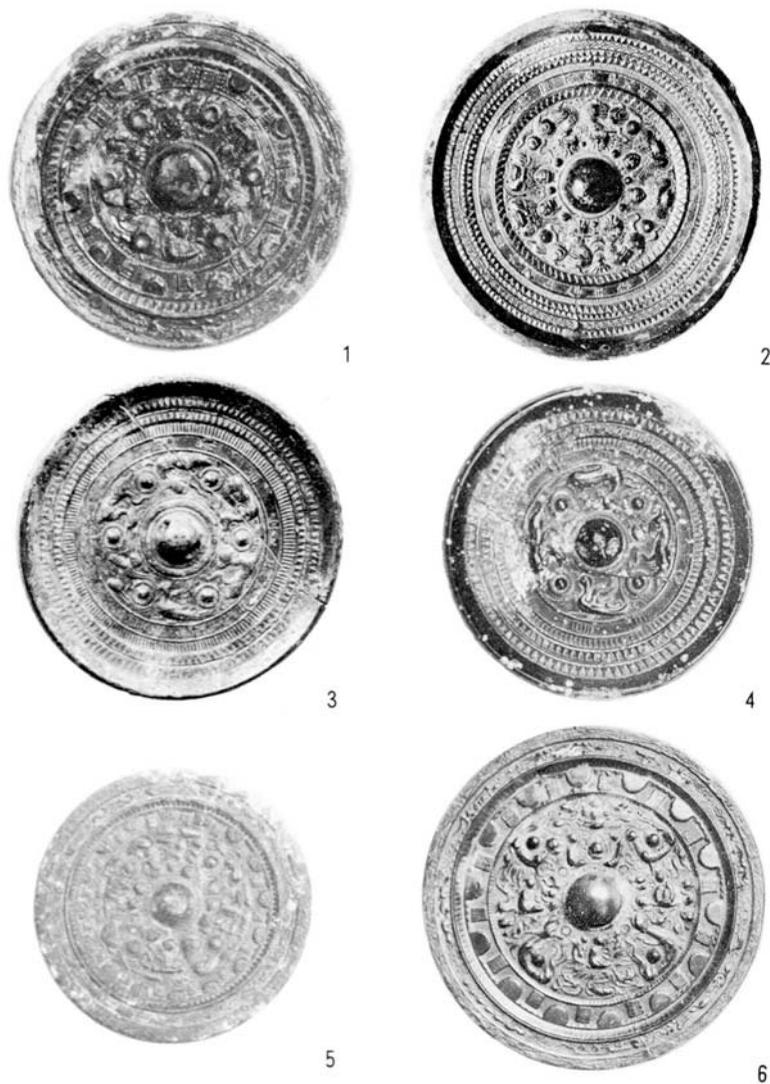
4像式獣帯鏡は中国、朝鮮半島での出土例をみると、青龍、白虎、朱雀、玄武の四神を主題にした図文構成のものが、後漢時代にみられるが<sup>88)</sup>、四神像のうち、玄武像は次第に鹿あるいは神仙像に置換される傾向が認められる。蔵王原

遺跡出土鏡などの鏡式はこの四神像を主題にした系統の中にあるといえるが、後漢時代に盛行した6像あるいは7像式の半肉彫式獣帯鏡に直接的な系譜をもつ斜縁6像式獣帯鏡と、たとえば内区図文、銘文などに非常に共通した特徴を有している。斜縁6像式獣帯鏡の場合、面径13cm前後、斜縁4像式獣帯鏡の場合、面径10cm前後となっており、それらは同時期における中形鏡、小形鏡の関係にあったとみられる。両者とも、整美なものが後漢時代末頃<sup>89)</sup>に出現し、我国で多くみられる「上方乍」の銘を有するものは三国時代以降兩晋時代にわたって盛行したのであろう。

※ 紙面の都合上、本稿は(上)、(下)に分割し、(上)では各遺跡出土の鏡について紹介し、(下)において、それらの提起する諸問題について考察することにする。なお、註は(下)において一括して収録することをあらかじめことわっておきたい。

(考古学助手)

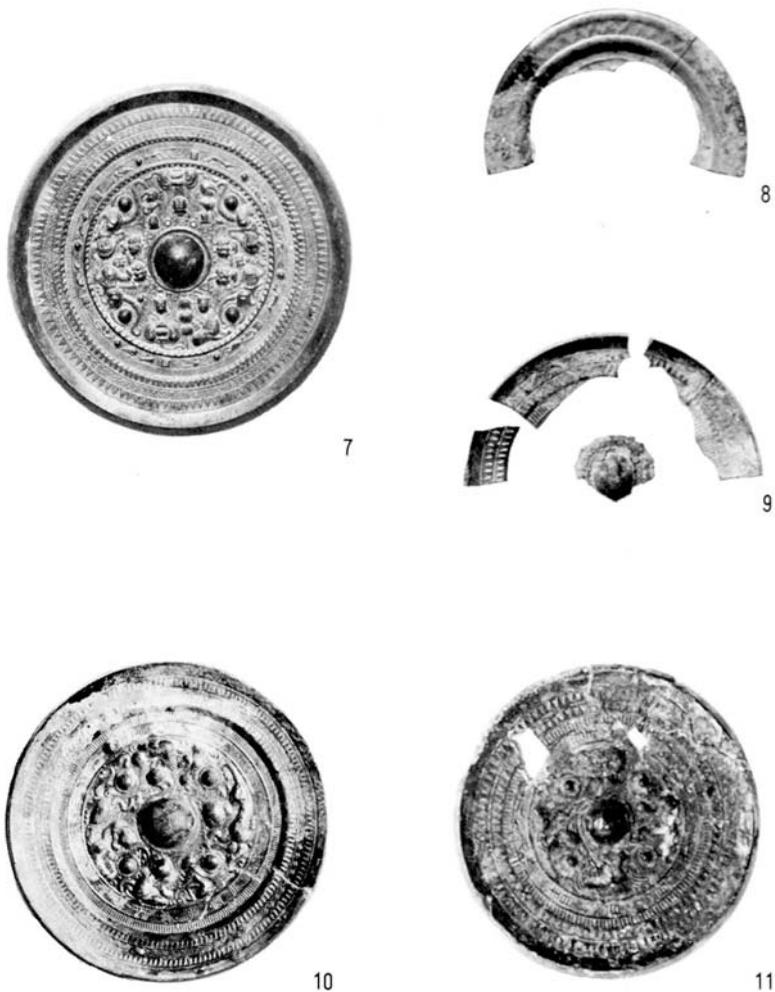
図版第 1



広島県出土の中国鏡(1)

- |              |               |
|--------------|---------------|
| 1. 宇那木山第2号古墳 | 2.3. 中小田第1号古墳 |
| 4. 馬場谷第2号古墳  | 5. 鍛治屋迫第4号古墳  |
| 6. 西酒屋高塚古墳   | (縮尺不同)        |

図版第 2



広島県出土の中国鏡（2）

7. 潮崎山古墳      8.9. 今岡      10. 石鎚山第1号古墳  
11. 蔵王原遺跡      (縮尺不同)

図版第 3



12



13



14



15



16



17



18

広島県出土の中国鏡 (3)

12. 神宮山古墳      13. 釜鉤谷遺跡      14. 四拾貫第9号古墳  
15. 石鏡権現第5号古墳墳丘裾第14号土壙墓  
16. 17. 石鏡山第2号古墳      18. 神辺御領遺跡      (縮尺不同)

On the Chinese Bronze Mirrors Excavated from  
Hiroshima prefecture

Part 1

Kiyohide FURUSE

Bronze mirrors, especially Chinese bronze mirrors were regarded as the symbol of power in the Yayoi and Kofun periods and assigned the political role in process of the construction of the earliest Japanese state. The bronze mirrors may be thus regarded as very important archaeological relics, but the exact decision of their types and production ages is indispensable to using them as archaeological materials.

In the present paper (part 1 in the present volume and 2 in next volume), I codify and argue about the Chinese bronze mirrors excavated from Hiroshima prefecture.

Part 1 is concerned primarily with the 18 bronze mirrors excavated from 15 sites (almost all of them are ancient tombs (kofun)): six belong

( 8 )

to the latter Han period, others to the early "Six Dynasties" period (centuries from 3rd to 4th A. D.). Another point with great archaeological importance is the difference of the way the mirrors were dealt with between Kinai area and Hiroshima prefecture. In the former area Chinese bronze mirrors of the latter Han period were buried in tombs in their original or unbroken forms, but not in the latter. In Hiroshima prefecture, they were buried in broken pieces.